

第8部会

明遍教学と静遍教学

那須 一雄

明遍(一一四二―一二二四)と静遍(一一六六―一二二四)は、ともに真言宗に関わりの深い人物で、法然の浄土教に帰依したことが知られているが、両者の浄土教義の理解には大きな違いがあることが確認される。

まず行理解について見ると、明遍は、称名念仏一行こそが命最後の浄土往生のための正定業であるとし、平生から機根に応じてできるだけ多くの称名念仏を勤修することを勧めたが、観念念仏を含めた諸行については、浄土往生のための行として積極的に勧めていたことは考えられない¹⁾。これに対して静遍は、称名念仏行を専ら修することを勧めるが、静遍にとって称名念仏とは、三昧発得、即身成仏という目的を達成するための手段であり、またはその目的を達成した状態において修せられているものという理解がされている。また諸行については、真実心を得ないで修する場合には否定的であるが、真実心を用いて修する諸行等については肯定的な立場を取る。但し最終的には念仏一行を専修している状態に達していなければならないと説く。次に信理解であるが、明遍も静遍も共に『観無量寿経』に説かれる三心具足の必要性を説く。但し明遍は三心具足の必要性を説きつつ、三心(特に至誠心)を発すことの困難性を述べている。これに対して静遍は、衆生は三心を発し難い存在であ

るという自覚は見られず、三心理解に自力的色彩の強いことが知られる²⁾。また散心念仏・定心念仏と三昧発得の問題については、明遍自身には三昧発得の経験が伝えられるが、浄土往生の行は散心の状態で修する称名念仏で十分とする立場をとり、定心や三昧発得の状態に達しなければ仏道が成就しないとは考えていなかった。また平生の見仏については慢等の心を起こすという理由で否定的な立場を取っていた。これに対して静遍は、散心念仏には、あまり肯定的な立場を示さず、定心で修する称名念仏から三昧発得し、更には即身成仏、自証成仏することを説くのが基本的立場であると言える。従って静遍においては此土における三昧発得は肯定的に捉えられ、此土において三昧を発得することも念仏行の一つの目的とする点で明遍教学との違いが見られる。両者の往生理解については、明遍は高野山に住している間も、即身成仏の思想は説いた形跡はなく、命最後の次世における浄土往生、即ち順次往生を最も勝れた救済とし、それが出来ない場合には順後往生することを願った。これに対し、静遍には順次往生や順後往生を目標して行道に励むという姿勢は見られない。静遍の浄土教において目指されているのは、あくまで此土における即身成仏、自証成仏である。最後に聖道門に対する姿勢については、明遍は聖道門は自分に適わない教えであると見るのに対し、静遍には聖道門・真言密教が自分に相応しない教えであるといった自覚は全くなく、真言密教と浄土門を対等の教えであると見ている。

以上、明遍と静遍は、ともに法然の浄土の教えを承けたが、両者の浄土教義の理解にはその基本的立場に大きな違いがある

ことが認められる。

註(1) 濱田隆氏や中野玄三氏は、『紀伊続風土記・高野山之部』の「上人住定中：上人、蓮花三昧図(別に在り)を密す」(続真言宗全書三七巻、二九四頁上段)の文を、蓮華三昧院伝来の阿弥陀三尊絵像について述べたものと見、明遍が観想念仏を中心行としていたことの根拠としている。(濱田隆「蓮華三昧院阿弥陀三尊像と明遍を巡る浄土教」仏教芸術五七号、一〇一頁、中野玄三『来迎図の美術』一七六—一七七頁)だが、この文は蓮華三昧院伝来の阿弥陀三尊絵像とは別の図について述べていると見るべきであろう。

註(2) 「他力者還弥陀名号云也。此三心具足云也」(『別異弘願集』)との記述もあるが、これも前後を読めば自力的な信理解を前提として説いた文であることがわかる。

「五悪段」生成に関する一試論

加藤 弘孝

《無量寿経》系統の經典にある「(三毒)・五悪段」という長文をめぐって、二つの学説が存在する。それは『梵本』、『藏本』にその存在が確認できず、また中国的色彩が色濃いことから、中国において付加がなされたとする学説と、あくまでインド成立を主張する学説である。両説ともにそれぞれ理があるため、現時点で確定させることは難しい。しかしながら「五悪

段」に中国的要素が多分に見られることは、紛れもない事実であり、中国的要素を考察することが、この問題の解決の糸口となることは間違いないところであろう。従って本論においては、幾つかの中国的要素を確認しながら自説を展開していきたい。

「五悪段」が存在するのは『大阿弥陀経』、『平等覚経』、『無量寿経』の三本であるが、本論では最古の訳本だと考えられる『大阿弥陀経』を典拠とする。ここには中国における歴史的事実が一部反映されていると考えられるのである。すなわち「五悪段」には、「興兵作賊、攻城格闘、劫殺截断、強奪不道」と戦乱の記述があり、また、「自大尊貴、有道、横行威武、加権力勢、侵剋易人、不能自知為惡」と武力、権勢をもって、他人を屈服させるという一文があり、更には、「無惡歲疾疫、無病瘦者、兵革不起、国無盜賊」と飢饉、疫病、戦乱、盜賊などの記述が見出せるのである。そしてこれらは『後漢書』や『三国志』といった正史に記述される世相と一致する。両者の一致については、訳者の支謙によるものと筆者は想定している。続け様に起こる戦争、疫病、天災などは否応無しに人々の生活水準を引き下げ、社会道徳を後退させたのである。この世相をまざまざと目撃した支謙が「五悪段」生成に関わったことは大いに有り得ることである。

問題は関与の比重である。先達が主張する様に全体を丸々、支謙が創出した(「五戒」を練った)のであろうか。しかしこれについても単純ではない。何故ならば、「五悪段」は、『大阿弥陀経』に限っていえば有機的な存在であり、とりわけ「流通